

# 青年期を対象とした両親間葛藤認知・反応尺度の作成

京都大学大学院教育学研究科

博士後期課程 3 回生 松 尾 理 奈

## Development of The Children's Perception of / Reaction to Interparental Conflict Scale for Adolescents

MATSUO, Rina

キーワード：両親間葛藤、家族システム論、世代間境界

Key Words : Interparental Conflict, Family System Theory, Generational Boundaries

### I 問題と目的

#### 1. 家族システム論から見た両親間葛藤が子どもに及ぼす影響

夫婦の関係やコミュニケーションに問題が見られるとき、しばしば見られる現象が子どもを巻き込んだ三角関係という問題である(中釜・野末・布柴・無藤, 2019)。親が子どもを味方につけようと積極的に巻き込む場合には、子どもはもう一方の親との関係が悪化することを恐れ、両親の間で板挟みとなり苦しむこととなる。もしくは、片方の親からもう一方の親についての愚痴や悪口を聞かされている間に、子どもも自然とその親に対して不信感や敵意を持つようになるというケースも少なからずあるだろう。母親が子どもの養育を主として担ってきた日本においては、母子が密着し、父親が孤立するというパターンが多いようである(柏木・平木, 2014; 亀口, 1992)。家族システム論においては、このように三者関係の中で 2 人が残りの 1 人に対抗してできる共同戦線のことを「連合 (coalition)」と呼び、なかでも、親子間など世代を超えた連合を「世代間連合 (cross generational coalition)」と呼んでいる(中釜ほか, 2019)。このような関係が長期間持続すると、子どもの自立が阻害され、親側もまた子離れが困難になるとされる(柏木・平木, 2014)。

また、親が意図的に子どもを巻き込もうとしていなくても、子どもが両親間葛藤に巻き込まれてしまうケースもある。たとえ幼い子どもであったとしても、感受性の鋭い子どもは親の表情や態度から否定的な兆候を読み取り、親を喜ばせたり、慰めたりしてストレス状況を緩和し、親を情緒的に支える行動を取ろうとする。子どもがもう少し大きくなり、両親間葛藤の背景を理解できるようになると、今度は親の代わりに葛藤の解決を図ろうとする場合も出てくる。依存傾向をもつ親の場合には、そのような子

どもに「頼りがいのある子」というレッテルを貼って重宝がり、一方、子どものほうは「良い子」の称号を得て自尊感情を満足させる（亀口, 1992）。こうして、一見お互いにメリットのあるように思える関係は半ば無意識的に繰り返され、より強固な共依存関係へと発展していく。慢性的な、未解決の両親間不和は共同養育関係を損ね、子どもがその解決を図ったり、不和の結果生じる緊張を和らげようとして両親間葛藤の中に巻き込まれていくことに繋がるのである（Minuchin, 1974）。このように、親を情緒的に支えたり、親の問題を代わりに解決しようとして親の役割を代行する子どもは「親的な子ども（parental child）」と呼ばれている。亀口（1992）によると、そのような子どもは「良い子」の称号を得る代償に、子どもとしての率直な感情表出を抑制することになることが多く、その抑制が過度になれば、その子どもの情緒的発達にとっては否定的影響が及ぶことは避けられないという。子どもである以上、完璧に親役割を果たすことは不可能で、いずれ限界がくる。そのような時に、心身症や不登校などの心理臨床的な問題として表れてくることは決して珍しいことではなく、臨床場面においてはよく見られる現象である（亀口, 1992; 中釜ほか, 2019）。

連合の場合においても、親的な子どもの場合においても、共通しているのが「世代間境界（generational boundaries）」が侵食され、曖昧になっているという点である。家族療法家の Minuchin（1974）は、健全な家族とは両親サブシステムと子どもたちの同胞システムとの間に明瞭な境界がある家族と考え、そのような境界が曖昧になっている家族のことを「纏綿家族（enmeshed family）」と呼んだ。纏綿家族においては誰がどのような役割を果たすかが曖昧なため、ストレス状況下において家族が適応したり変化したりするために必要な資源を欠き、十分な機能が果たせなくなる。また、纏綿家族では1人の行動が即座に他の構成員に影響を与え、個人のストレスは境界を越えて速やかに他のサブシステムの構成員にまで伝わっていく。そのような渾然一体とした家族の環境の中で育った子どもは情緒発達や自律性が妨げられ、また構成員同士が精神的に依存し合う共依存関係に陥り、神経症レベルの病理をもつ家族員が生まれやすいといわれている（中釜ほか, 2019）。このように、家族システム論においては、子どもが両親間葛藤に巻き込まれることは子どもの情緒発達や自律性の面で悪影響を及ぼすと考えられており、実際に臨床場面においてもそのような事例が多く見られている。では、実証的な研究においてはこのことはどのように検討され、どのような結果が得られているのだろうか。

## 2. 両親間葛藤が子どもに及ぼす影響についての先行研究

両親間葛藤と子どもの心理的適応の関連については数多くの実証的研究が欧米を中心に蓄積されており（Cummings & Davies, 2002）、子どもの外在化型問題（攻撃的な問題行動）と内在化型問題（抑うつなどの神経症的問題）との関連が一貫して示されている（Cummings & Davies, 1994; Grych & Fincham, 1990）。また、近年、両親間葛藤については親の報告よりも、子どもがどのように認知、評価しているかが、子の適応問題への影響を理解するうえで重要であることが指摘されている（Grych & Fincham, 1990）。現在、両親間葛藤の研究において広く用いられている理論には Grych & Fincham（1990）の認知状況的枠組み（cognitive-contextual framework）と Davies & Cummings（1994）の情緒安定性理論（emotional security theory）の2つがある。

認知状況的枠組みは子どもの認知過程、つまり両親間葛藤の理解と評価が両親間葛藤の子どもへの影

響を媒介するという理論 (Grych & Fincham, 1990) であり、認知過程を重視するという点で Lazarus & Folkman (1984) らのストレス・コーピング理論と共通している。

情緒安定性理論は両親の夫婦間葛藤が子どもの情緒安定性を脅かすことによって子どもの心理的適応に影響を及ぼすという理論 (Davies & Cummings, 1994) であり、両親間葛藤を目撃するとまず情動反応が生起され、次に情緒安定性が脅かされると、両親間葛藤に晒される機会を減少させようとする行動が喚起され、最後に両親間葛藤が家族や自分にとって持つ意味についての表象を作り上げるというモデルが仮定されている。これは愛着が内的表象 (ワーキングモデル) に影響を及ぼすというモデルと類似している (Davies & Cummings, 1994)。

それぞれの理論をもとに両親間葛藤の性質やそれに対する子ども反応を測定する尺度が作成されているが、どちらも子どもの側から両親間葛藤を捉えているという点で共通している。認知状況的枠組みをもとに作成された尺度が The Children's Perception of the Interparental Conflict scale; CPIC (Grych, Seid & Fincham, 1992) で、「葛藤の深刻さ (頻度、激しさ、解決)」、「自己非難 (子どもについての内容、自己非難)」、「恐れ (恐れ、対処効力)」の 3 因子からなる。なお、当初想定されていた「三角関係 (triangulation; 子を巻き込むこと)」と「安定性 (stability; ケンカの原因がいつも同じであること)」については因子分析の結果が安定せず、この 3 因子モデルからは除外されている。また、Grych ら (1992) は分析の結果、夫婦間葛藤に対する自己非難と恐れが子どもの内在化型問題と関連することを明らかにしている。

一方、両親間葛藤に対する子どもの反応に重きを置いた情緒安定性理論をもとに作成された尺度が The Security in the Interparental Subsystem scale; SIS (Davies, Forman, Rasi, & Stevens, 2002) で、両親間葛藤を目にした際の頻繁な、持続する、制御不能なネガティブ情動を測定する「情動反応 (Emotional reactivity)」、「行動の調節不全 (Behavioral Dysregulation)」と、両親間葛藤場面において両親のネガティブ情動への曝露を調節しようとする行動である「回避 (Avoidance)」、「介入 (Involvement)」、両親間葛藤が自身や家族にもたらす結果についての評価を測定する「建設的家族表象 (Constructive Family Representation)」、「破壊的家族表象 (Destructive Family Representation)」、「葛藤の波及 (Conflict Spillover Representation)」の 7 因子からなっている。どちらの尺度も互いに関連し合っているが、SIS は子どもの反応を多面的に捉えることのできる点において、CPIC と比較して強みがある (Davies et al. 2002)。

日本においては、川島・眞榮城・菅原・酒井・伊藤 (2008) が Grych ら (1992) の CPIC を元に「両親間葛藤尺度」を作成している。さらに CPIC では除外された「三角関係」の項目を元に、新たな項目を追加して「巻き込まれ感尺度」を作成し、「巻き込まれ感」を媒介して「恐れ」と「自己非難」が抑うつを引き起こしていることを明らかにした。しかし、山本・伊藤 (2012) が指摘したように、巻き込まれ感尺度は両親間葛藤尺度から独立しており、また、その特性内容に適さない項目が含まれていた。そこで、山本・伊藤 (2012) は Grych ら (1992) の CPIC と川島ら (2008) の両親間葛藤尺度を元に、新たに巻き込まれ感を表す項目も含めたうえで、日本の夫婦関係の実情に見合った「青年期の子どもが認知する夫婦間葛藤尺度」を作成した。その際、親側の要因 (葛藤の激しさ、葛藤の持続性、葛藤の解決の 3 因子) と子側の要因 (恐れ・身体反応、巻き込まれの 2 因子) に分けて検討し、親側の「葛藤の

激しさ」が子側の「巻き込まれ」を媒介し、自尊感情に負の、抑うつに正の影響を及ぼしていることを示した。しかし、子側の要因の「巻き込まれ」の項目は「両親は、私に相手の悪口や不満を言う」など、すべて両親が主語となった文章となっており、これは厳密には子側の要因というよりも、親側の要因、つまり「巻き込み」と捉えるほうが適切であると思われる。また、川島ら（2008）の両親間葛藤尺度も山本・伊藤（2012）の青年期の子どもが認知する夫婦間葛藤尺度も、Daviesら（2002）のSISに含まれていたような回避や介入といった、両親間葛藤に対して子どもがどのように反応しているかという側面が考慮されていない。家族システム論の視点で考えるならば、両親間葛藤に対して子どもが取る態度は子どもの適応に影響を与える重要な要因であると考えられるため、これらを含めた尺度を作成し、検討することが必要だろう。

### 3. 目的

本研究では、Grychら（1992）のCPICとDaviesら（2002）のSISの両尺度を元にした「両親間葛藤認知・反応尺度」を作成し、子どもが両親間葛藤をどのように認知し、反応しているかについてより多面的に捉えることを目的とする。なお、両親間葛藤に対する回避や介入といった反応は青年期前期～中期において変化が少ない、もしくはピークとなり、青年期後期においてはネガティブな情動反応は減少する（Cummings, E. M., Ballard, M., & El-Sheikh, M., 1991）という先行研究があること、青年期は親との心理的距離ができ、親子関係や両親の夫婦関係をより客観的に捉えることができるようになる時期であることから、本研究では青年期の子どもを対象に調査を行う。

## II 方法

### 1. 対象者

国立大学であるA大学の25歳以下の大学生、大学院生232名（男性114名、女性117名、その他1名）を調査対象者とした。平均年齢は20.95歳（ $SD=1.94$ ）であった。このうち、長子は114名（49.1%）、中間子は21名（9.1%）、末子は54名（23.3%）、一人っ子は43名（18.5%）で、現在父親と同居している者は50名（21.6%）、別居している者は169名（72.8%）、離別・死別している者は13名（5.6%）、母親と同居している者は53名（22.8%）、別居している者は175名（75.4%）、離別・死別している者は4名（1.7%）であった。

### 2. 調査内容

フェイスシート（年齢、性別、家族構成、出生順、父親・母親との同居の有無など）と以下の内容を含んだWebアンケートを作成した。

**両親間葛藤認知・反応尺度** Grychら（1992）のCPICとDaviesら（2002）のSISの両尺度を元に、重複する項目や日本人には当てはまりにくいと思われる項目を除き、項目数の少ない下位尺度には新たに項目を追加して再構成したものを作成した。また、親側が夫婦間葛藤に子どもを巻き込もうとする行為である「巻き込み」と、子側が両親間葛藤に巻き込まれて板挟みになっていると感じている「巻き込

まれ」は区別して考える必要があると考え、既存の三角関係や巻き込まれ感を測定する尺度の項目を参考にしながら、これらを新たに追加した。なお、CPIC の日本語訳は川島ら (2008) の両親間葛藤尺度と山本・伊藤 (2012) の青年期の子どもが認知する夫婦間葛藤尺度を参考にした。結果、葛藤の深刻さとして、「頻度」、「激しさ」、「持続性」、「巻き込み」の 4 因子、情動反応として「情動反応」、「調節不全」の 2 因子、調節行動として「回避」と「介入」の 2 因子、内的表象として「対処効力」、「自己非難」、「破壊的な家族表象」、「巻き込まれ」の 4 因子、計 12 因子を想定した、53 項目からなる質問紙尺度が作成された。なお、項目に対する評定は、「1. まったくあてはまらない、2. あまりあてはまらない、3. どちらともいえない、4. ややあてはまる、5. よくあてはまる」の 5 件法であった。

### 3. 手続き

大学生協のアルバイト広告を通して、Web アンケートへの協力者を募集した。また、筆者からの依頼に基づき、大学のオンライン講義後に担当教員から受講生に向けて、参加は自由意思によること、当該の授業とは無関係のものであることを伝えたくて、調査への協力を呼びかけた。調査協力者は提示された URL にアクセスし、各自の所有する端末から Web アンケートに回答した。なお、本研究は、学内の臨床心理学研究倫理審査会の承認を受けて実施された。また、倫理的配慮として、両親間の葛藤や親子関係の問題で現在「深刻な」悩みを抱えていない人を対象者としていることを事前に伝えたくて、協力者を募った。

## III 結果と考察

### 1. 両親間葛藤認知・反応尺度の検討

以降の統計分析にはすべて、IBM SPSS Statistics 25 を用いた。両親間葛藤認知・反応尺度の全 53 項目について項目分析を行った結果、多くの項目で床効果が見られ、特に「調節不全」と「自己非難」においてはすべての項目で床効果が見られたが、ある程度親との距離を取ることができ、両親間葛藤を客観的に眺められるようになる青年期の子どもにおいては予想され得る結果だと考え、この段階では分析の対象に残すこととした。全 53 項目で因子分析 (最尤法) を行ったところ、固有値の減衰状況と解釈可能性から 5 因子解が妥当であると判断された。そこで、5 因子構造を想定し、再度因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を行い、負荷量が .30 以下の値を示した項目と、複数の因子に .30 以上の負荷量を示した項目を除外し、繰り返し因子分析を行ったところ、すべての項目がいずれか 1 つの因子に対して高い因子負荷を示したため、これを最終的な因子パターンとした (表 1)。なお、回転前の 5 因子での累積寄与率は 54.46% であった。第 1 因子は「頻度」、「激しさ」、「持続性」、「巻き込み」の項目が 1 つに統合された形となったため、「葛藤の深刻さ」(13 項目) と命名した。第 2 因子には「情動反応」と「破壊的な家族表象」の項目が含まれたため、「恐れ・不安」因子 (9 項目) とした。第 3 因子には「調節不全」と「自己非難」の項目が含まれたため、「自己非難」因子 (8 項目) とした。第 4 因子と第 5 因子はそれぞれ「回避」(5 項目) と「介入」(7 項目) の項目が含まれていたため、そのままの因子名とした。

次に、信頼性を検討するために各下位尺度の  $\alpha$  係数を算出した。その結果、第 1 因子  $\alpha = .91$ 、第 2 因

子  $\alpha = .93$ 、第3因子  $\alpha = .84$ 、第4因子  $\alpha = .84$ 、第5因子  $\alpha = .80$  となり、十分に高い値が得られ、内的整合性が確認された。また、下位尺度ごとの加算平均を下位尺度得点とし、平均値、*SD*、下位尺度間の相関係数を算出したところ、「葛藤の深刻さ」と「介入」、「自己非難」と「回避」、「回避」と「介入」の間はほぼ無相関となり、それ以外の組み合わせでは有意な正の相関が見られた（表2）。

なお、今回作成された尺度では、「対処効力」と「巻き込まれ」は抽出されなかった。「対処効力」は元々CPICの下位尺度で、対処効力感が低いほど得点が高くなるように作成されており、逆転項目（例「両親がけんかをしていても、私はたいい状況を良くする手助けができる」）はSISの「介入」の因子に、それ以外の項目（例「両親がけんかをしている時は、それをとめるために私にできることは何もない」）はSISの「回避」因子に統合されている。一方、「巻き込まれ」はCPICの「三角関係」の尺度を参考に作成したが、ほとんどの項目が因子分析の結果削除されてしまった。Grychら（1992）がCPIC尺度を作成する際も、複数のサンプルで調査を行った結果、この項目については一貫した結果が得られなかったため、最終的にCPICの尺度からは除外している。また、その後CPICの妥当性の評価を行った別の研究者による複数の研究でも安定した結果が出ていない（Holt, Helland, Gustavson, Cummings, Ha, & Røysamb, 2020）。今回も先行研究同様の結果となったと言える。このことは、両親間葛藤に巻き込まれているという感覚は時にそれ自体子ども側で明確に意識しづらく、両親間葛藤の他の様々な要素と複雑に絡み合い、渾然一体となっている様子を反映しているのかもしれない。加えて、今回、内的表象として想定した「自己非難」と「破壊的な家族表象」もそれぞれ他の下位尺度と統合されている。「破壊的な家族表象」については「両親がけんかをしていると、私は家族の将来が心配になる」などといった項目からなる、いわば将来への不安である。それが「情動反応」の現在感じている不安感と同じ下位尺度に分類された。このことから、内的表象と実際に生じている情動反応や行動とは明確に区別し難いものであることが示されたと言えるだろう。

また、「自己非難」と「調節不全」が1つの下位尺度に統合されたのも興味深い結果である。Grychら（Grych, Fincham, Jouriles, & McDonald, 2000; Grych, Harold, & Miles, 2003）は両親間葛藤と子ども外在化型問題との媒介変数として「自己非難」を挙げている。「調節不全」は両親間葛藤に対する苛立ちを抑えられず、その苛立ちを外部に向かって言葉や行動で表出するという項目からなっていて、外在化型問題とも高い相関が見られている（Davies et al. 2002）。両親間葛藤の原因を自身に帰属させることと、苛立ちや怒りを外部に向かって表出することの間には強い関連性が存在することが今回の因子分析の結果からも示唆された。

## 2. 協力者の属性による差の検討

続いて、協力者の属性変数（性別、出生順）により、両親間葛藤認知・反応得点に差が見られるかを検討するために、*t*検定を行った。まず、男女差を検討したところ、「回避」において、女子の方が男子よりも有意に得点が高かった（ $t(229) = 2.09, p < .05$ ）。一方、「自己非難」においては、男子の方が女子よりも有意に得点が高かった（ $t(229) = 2.71, p < .01$ ）。Daviesら（2002）の研究では、女子のほうが「情動反応」、「回避」、「介入」において男子よりも得点が高いという結果が示されたが、今回の研究では「情動反応（恐れ・不安）」、「介入」においては性別による有意差は見られなかった。Daviesら

(2002) の研究の調査協力者の平均年齢は 12.57 歳であったことから、年齢によって性差の様相は異なるものと考えられる。また、出生順による差を検討したものの、いずれの下位尺度においても有意差は見られなかった。

#### IV まとめと今後の課題

本研究では、子どもがどのように両親間葛藤を認知し、それに対してどのように反応しているかを多面的に捉えるために、青年期を対象とした「両親間葛藤認知・反応尺度」を作成した。結果、「葛藤の深刻さ」、「恐れ・不安」、「自己非難」、「回避」、「介入」の 5 つの下位尺度、42 項目からなる尺度が作成された。本研究は、特に「回避」や「介入」といった両親間葛藤に対して子どもが取る行動を考慮し測定することを可能とした点で、日本における両親間葛藤が子どもに及ぼす影響についての研究に新たな視点を導入したと言える。

一方、本研究の限界としては、調査対象が特定の大学の学生に限定されていたことが挙げられる。また、今回の調査協力者の 8 割近くが親元を離れて一人暮らしまたは寮生活をしている学生であった。両親と別居している者に比べ、両親と同居している者の方が両親と過ごす時間が長く、両親間葛藤に巻き込まれている可能性が高いと考えられるため、今回の結果の一般化には慎重になる必要がある。今後、より幅広い世代や属性を対象に調査を行い、尺度の妥当性について検討していくことが求められる。

表 1 両親間葛藤認知・反応尺度 因子分析結果

項目内容	I	II	III	IV	V	
<b>I「葛藤の深刻さ(13項目)」(<math>\alpha = .91</math>)</b>						
両親はめったに言い争いをしない*	<b>-.89</b>	-.01	.10	.22	.14	
両親が言い争うのは、日常的光景だ	<b>.88</b>	-.11	-.01	-.02	.10	
両親は私の前であつてもよくけんかをする	<b>.86</b>	-.07	-.05	.02	.01	
両親はお互いの悪口や不満を家の中でよく言う	<b>.75</b>	-.14	.03	.08	.13	
私は両親がけんかをしたりめめたりしているのを見たことがない*	<b>-.68</b>	-.10	.24	.02	.08	
両親はけんかをやめた後でも、まだお互いに対して怒っている	<b>.66</b>	.00	.05	.11	.14	
両親はけんかをする時、興奮して激しく言い争う	<b>.65</b>	.09	.05	.07	.00	
両親はけんかの後も、しばらくは相手に意地悪をしたり皮肉を言ったりする	<b>.65</b>	-.04	.07	.19	.14	
両親は意見が合わない時も、大きな声を出さずに冷静に話し合う*	<b>-.63</b>	-.02	.00	.04	.18	
両親はけんかをする時、よく大きな声をあげる	<b>.60</b>	-.01	.14	.18	-.10	
両親はけんかをやめた後はお互いに優しくする*	<b>-.41</b>	-.06	.18	.09	.21	
両親はけんかをしているとき、私に味方になってもらいたがる	<b>.40</b>	.06	.05	.03	.27	
両親はけんかをしている時、物に当たる	<b>.37</b>	.11	.29	-.01	-.05	
<b>II「恐れ・不安(9項目)」(<math>\alpha = .93</math>)</b>						
両親がけんかをしていると、私は怖くなる	-.15	<b>.90</b>	.05	.02	-.06	
両親がけんかをしていると、私は悲しくなる	-.12	<b>.85</b>	-.15	-.02	.13	
両親がけんかをしていると、私は不安になる	-.07	<b>.82</b>	-.10	.10	.00	
両親がけんかをしていると、何か悪いことが起こるのではないかと不安になる	-.04	<b>.81</b>	.08	.02	-.02	
両親がけんかをしていると、私は家族の将来が心配になる	.09	<b>.75</b>	.04	-.05	-.04	
両親がけんかをした後は、私はなかなか悪い気分を振り払うことができない	.04	<b>.74</b>	.03	-.02	-.05	
両親がけんかをしていると、私は両親の問題を考えずにはいられなくなる	.07	<b>.71</b>	.04	-.04	.10	
両親がけんかをしていると、私は両親が次に何をするのか心配になる	.18	<b>.58</b>	.09	.09	-.02	
両親がけんかをしていると、離婚するのではないかと心配になる	.27	<b>.56</b>	.07	-.03	-.04	
<b>III「自己非難(8項目)」(<math>\alpha = .84</math>)</b>						
両親がけんかをしているのはたいてい私のせいだ	-.09	-.01	<b>.85</b>	.03	-.13	
両親ははっきりとは言わなくても、両親のけんかの責任は私にあると分かっている	.00	-.02	<b>.77</b>	-.05	-.07	
両親がけんかをする時、私は物に当たる	-.02	.04	<b>.73</b>	-.03	-.07	
両親は私が何か悪いことをしたときにもめることが多い	-.05	-.05	<b>.73</b>	.07	-.09	
私がいなければ両親はけんかをしなと思う	-.15	-.07	<b>.68</b>	.07	.11	
両親がけんかをする時、私は問題を起こして両親を困らせたい	.00	.02	<b>.48</b>	-.16	.07	
両親がけんかをする時、私は家族に対して怒鳴ったり、ひどいことを言う	.16	.07	<b>.46</b>	-.14	-.01	
両親がけんかをしていると、どちらかの味方をしないとイヤな気がする	.02	.15	<b>.45</b>	-.12	.24	
<b>IV「回避(5項目)」(<math>\alpha = .84</math>)</b>						
両親がけんかをしている時、私はできるだけ静かにしようとする	-.05	.01	-.07	<b>.80</b>	-.03	
両親がけんかをしていると、私はその部屋から出るなどして両親から離れようとする	.00	-.05	-.01	<b>.76</b>	.01	
両親がけんかをしていると、私は両親からできるだけ離れていたいと思う	.10	.03	-.01	<b>.74</b>	-.13	
両親がけんかをしている時、私はただ状況が良くなることを望んで待っている	.03	.05	-.08	<b>.72</b>	.06	
両親がけんかをしている時は、それをとめるために私にできることは何もない	.10	.10	.01	<b>.50</b>	-.12	
<b>V「介入(7項目)」(<math>\alpha = .80</math>)</b>						
両親がけんかをしていると、私は両親のどちらか、または両方を慰めようとする	.08	.12	-.15	-.03	<b>.71</b>	
両親がけんかをしていると、私は明るく振る舞って両親の気分を良くしようとする	-.06	-.02	-.05	.06	<b>.68</b>	
両親がけんかをしていると、私は両親のために問題を解決してあげようとする	.07	.06	-.03	-.19	<b>.66</b>	
両親がけんかをしている時、私はたいてい状況を良くする手助けができる	.04	-.12	-.01	-.22	<b>.66</b>	
両親がけんかをしていると、私は他の話題を持ち出して両親の気をそらせようとする	-.12	-.08	.07	.11	<b>.62</b>	
両親がけんかをしていると、私は両親に対して優しくするなどして、良い子でしようとする	-.24	.26	-.02	.20	<b>.47</b>	
両親がけんかをしているとき、私を介して会話しようとする	.19	-.04	.29	.04	<b>.35</b>	
*は逆転項目	因子間相関	I	II	III	IV	V
	I	—	.41	.35	.26	-.03
	II		—	.42	.56	.38
	III			—	.13	.26
	IV				—	.14
	V					—

表 2 両親間葛藤認知・反応尺度 下位尺度相関、平均値、標準偏差

	葛藤の深刻さ	恐れ・不安	自己非難	回避	介入	<i>M</i>	<i>SD</i>
葛藤の深刻さ	—	.43**	.30**	.30**	.00	2.66	0.91
恐れ・不安		—	.39**	.51**	.37**	2.86	1.14
自己非難			—	.05	.26**	1.46	0.57
回避				—	.09	3.53	0.99
介入					—	2.20	0.80

\*\**p* < .01

## 引用文献

- Cummings, E. M., Ballard, M., & El-Sheikh, M. (1991). Responses of children and adolescents to interadult anger as a function of gender, age, and mode of expression. *Merrill-Palmer Quarterly*, 37, 543-560.
- Cummings, E. M., & Davies, P. (1994). *Children and marital conflict: The impact of family dispute and resolution*. New York: Guilford.
- Cummings, E. M., & Davies, P. T. (2002). Effects of marital conflict on children: Recent advances and emerging themes in process-oriented research. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, 43, 31-63.
- Davies, P. T., & Cummings, E. M. (1994). Marital conflict and child adjustment: An emotional security hypothesis. *Psychological Bulletin*, 116, 387-411.
- Davies, P.T., Forman, E.M., Rasi, J.A., & Stevens, K.I. (2002). Assessing children's emotional security in the interparental relationship: the security in the Interparental subsystem scales. *Child Development*, 73(2), 544-562.
- Grych, J.H., Fincham, F.D. (1990). Marital conflict and children's adjustment: a cognitive-contextual framework. *Psychological Bulletin*, 108, 267-290.
- Grych, J. H., Fincham, F. D., Jouriles, E. N., & McDonald, R. (2000). Interparental conflict and child development: Testing the mediational role of appraisals in the cognitive-contextual framework. *Child Development*, 71, 1648-1661.
- Grych, J.H., Harold, G.T., & Miles, C.J. (2003). A Prospective Investigation of Appraisals as Mediators of the Link Between Interparental Conflict and Child Adjustment. *Child Development*, 74(4), 1176-1193.
- Grych, J.H., Seid, M., & Fincham, F.D. (1992). Assessing marital conflict from the child's perspective: the Children's perception of Interparental conflict scale. *Child Development*, 63(3), 558-572.
- Holt, T., Helland, M.S., Gustavson, K., Cummings, E.M., Ha, A., & Røysamb, E. (2020). Assessing Children's Response to Interparental Conflict: Validation and Short Scale Development of SIS and CPIC-Properties Scales. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 48, 177-196.
- 柏木恵子・平木典子 (2014). 日本の夫婦 パートナーとやっていく幸せと葛藤 金子書房
- 亀口憲治 (1992). 家族システムの心理学 北大路書房
- 川島亜紀子・眞榮城和美・菅原ますみ・酒井厚・伊藤教子 (2008). 両親の夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの認知と抑うつとの関連. *教育心理学研究*, 56, 353-363.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer
- Minuchin, S. (1974). *Families and family therapy*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 中釜洋子・野末武義・布柴靖枝・無藤清子 編 (2019) 家族心理学 [第2版] 有斐閣ブックス
- 山本倫子・伊藤裕子 (2012). 青年期の子どもが認知した夫婦間葛藤と精神的健康との関連. *家族心理学研究*, 26-1, 83-94.